

「希望 (のぞみ)」の学習を通して、様々な人々とともに、積極的に、粘り強く課題解決に取り組む中で、社会において有為な人となるべく自己の向上をはかる子どもの育成を目指します！

文部科学省研究開発学校 4 年次を迎えて

広島大学附属三原学校園は、平成 24 年度から 3 年間、文部科学省研究開発学校に指定され、平成 26 年度で最終年度を迎えましたが、その研究成果が高く評価されて、今年度からさらに 3 年間の研究延長指定を受けました。これは、全国的にも珍しいことで、先生方の並々ならぬ努力がもたらした快挙だと言えるでしょう。

今年度は、研究開発課題「社会的自立の基礎となる資質・能力及び態度・価値観の体系的な育成のための、幼小中一貫教育の新領域を核とした自己開発型教育の研究開発－4 年次－」として、「希望 (のぞみ)」の新たななる挑戦に取り組むことになりました。新たな目標は、次の 2 点です。

- (1) 「保育・教科」の本質に根ざした資質・能力と、「希望 (のぞみ)」で育む資質・能力との関連を明らかにすること
- (2) 新たな学年区分に基づいて再編したカリキュラムに対応した評価の在り方を明らかにすること

(1)に関して、「希望 (のぞみ)」で育む資質・能力とは、「キャリアプランニング能力」、「人間関係形成・社会形成能力」、「課題対応能力」です。これらは、学校の教育課程全体を通して、通教科的に育む能力であり、間近に迫った次の学習指導要領の改訂において、文科省が最重要視している「21 世紀型能力」(通教科的能力)と関連しています。「21 世紀型能力」



は、「思考力」を中核に置き、それを支える「基礎力」を基盤に据え、思考力の使い方を方向づけるものとして「実践力」を位置づけた三層構造となっています。文科省が提示する「思考力」は「希望 (のぞみ)」の授業において今まさに育てているものであり、「実践力」は「希望 (のぞみ)」の授業の積み重ねによって、長いスパンを通して育成していくものです。これらのことから、本学園

が取り組んでいる「希望（のぞみ）」は、21世紀型能力を育成するものであると定義でき、これから先の教育界がめざすものを先行実施していると言えるでしょう。一方で、文科省は、21世紀型能力と教科の関連性を探究することが今後の課題であるともしています。「希望（のぞみ）」で新たな目標として掲げている(1)の意義はそこにあります。

(2)に関して、新たな学年区分は、12年間の「発達と接続」を意識したものであり、「入門期」：年少・年中、「幼小接続期」：年長・1年・2年、「中間期」：3年・4年、「小中接続期」：5年・6年・7年、「最終期」：8年・9年です。発達段階に即した区分内での子ども同士の交流や、校種を超えた教員の連携は、新たな幼小中連携の可能性を追究するうえで非常に重要なことです。現在、文科省は、5歳児の義務教育化を検討するなかで、幼小接続期教育の充実を求めています。また、政府は、義務教育9年間の小中一貫校を制度化する学校教育法改正案を閣議決定し、一貫校を「義務教育学校」としました。これにより、今後、小中連携は全国的に推進されていくでしょう。本学校園が将来的にめざすのは、幼稚園3年課程を含む12年一貫の義務教育学校園です。これは、広島大学の他附属ではめざすことのできない、本学校園の特徴であると言えます。新たな目標の(2)の意義はそこにあります。



教育と研究に対する本学校園の先生方の情熱には心底感服しています。日々の忙しい仕事に加えて、「希望（のぞみ）」という新領域の非常に難しい研究開発に熱心に取り組まれる姿には心が打たれます。保護者の皆さまにおかれましても、本学校園の研究開発学校としての使命を十分にご理解の上、さらなるご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

広島大学附属三原学校園長 三村真弓

「研究開発だより」（カラー版）をHPに掲載していますので、併せてご覧ください。

<http://www.hiroshima-u.ac.jp/fmihara/kenkyu/>